

ついて述べた。徐氏によると東北はソ連に近かったため重化学工業の重点地域として発展したが、資源依存型産業（大慶など）には後続産業が無く、また市場経済の経験が乏しいために市場経済マインドが脆弱である。対外的には対北朝鮮交流は緊密に行われているが、国境地域などでは密輸の問題がある。中国東北と韓国との経済交流も盛んだが、韓国の対中国投資は南部へ移る傾向にあるため東北地域の位置づけは低下傾向にある。今後の可能性として、市場経済へ向かっている北朝鮮が世界市場へ出ようとするなら、まず中国で実験するのが良いとの考えを述べた。結論として、第一に、東北振興戦略の提示により中国、韓国、北朝鮮の3国がより一層協力していくための環境づくりが出来つつある。第二に、FTAという形で互いに有益な協力体制構築へ向け前進しようとしていると述べた。

続いて私が、「日本から見た中国東北3省と朝鮮半島との交流展望」と題して日本の視点について発表した。日本から見ると中国東北3省と北朝鮮とは同列で論じられないほどの違いがあることを経済交流の実績を示しながら述べた。日本にとって、東北3省は、既に活発な経済交流が進んでいる中国沿海部の背後にある大きな可能性を有する地域として認識され、民間企業や市民レベルでの交流も盛んになっている。一方、北朝鮮とは国交も無く、経済交流・人的交流ともに極めて限定的である。さらに拉致問題、核開発疑惑などの問題で、日本の国内世論は北朝鮮に対して厳しくなっている実情を述べた。今後の展開についても中国東北3省との交流については楽観視できるが、北朝鮮とは政治的問題が解決しない限り経済交流も望めないことを強調した。

次に、韓国・慶南大学北韓大学院の梁文秀教授が「中国東北3省の開発と南北経済協力の在り方」と題して発表した。まず、南北経済協力を推進すべきとの立場から、交易は拡大してきたが韓国企業の対北朝鮮投資は発展していないとし、開城工業団地計画が順調に進めば大きな発展が望めると期待を示した。次に南北に加えて北東アジア諸国の協力が必要であるとして、エネルギーや鉄道における協力の可能性が考えられるが、どれも困難であるとの展望を示した。また、東北3省の開発が南北経済協力に及ぼす影響について多面的評価を行った。肯定的な側面としては、韓国資本が東北3省の発展に寄与でき、3国の経済協力活性化につながる可能性がある。否定的な面では、北朝鮮と中国間の経済協力が深まるにつれて韓国が排除され、さらに北朝鮮、中国、ロシアの3カ国協力が拡大する可能性もあることを心配する。北朝鮮の中国への依存が強まる事に関しては、韓国側に強い警戒心があることがこの後の討論で

韓・中・日共同シンポジウム at 仁川

ERINA調査研究部主任研究員 辻久子

韓・中・日共同シンポジウム

2004年11月10日、韓国仁川広域市の松島ビーチホテルにおいて、仁川発展研究院の主催により、「中国東北3省と韓国・北朝鮮」と題した国際シンポジウムが開催された。シンポジウムは北朝鮮及び中国東北3省の最近の変化についての展望と経済協力における課題を主テーマとし、韓国・中国・日本の専門家が出席して意見を交わした。会場では韓国語・中国語・日本語の同時通訳が用意され、約150名が参加した。

テーマ設定の背景には、最近中国東北3省で再建の取り組みが始まっており、また、北朝鮮も徐々に改革が進んでいることがある。韓国では、これらの韓国の隣国で起きている変化の相互関係や今後の北東アジアに及ぶ影響への関心が高い。シンポジウムでは主催者が指定した内容に沿った3つの発表が行われ、その後、討論セッションが持たれた。

まず、吉林大学朝鮮・韓国研究所の徐文吉所長が「中国東北振興戦略とそれに伴う韓国・北朝鮮の協力に関する展望」と題して発表し、中国東北地域の特徴や東北振興戦略誕生の歴史的背景、近隣諸国との関係に関する展望などに

も分かった。

討論セッションでもいくつかの興味深い発言があった。

秦鴻祥・北京大学教授は中国の東北振興戦略に関して、現代的重化学工業基地を建設し、計画経済から市場経済への転換を実現する意図があり、中央政府はプロジェクトを選んで多額の資金支援を行う用意があるとコメントした。さらに東北振興は北東アジア地域協力の道を開くものであると期待を述べた。

呉承烈・韓国外国語大学教授は、中国の東北振興策と北朝鮮の改革はそれぞれの国内的問題の解決策として行われているもので、相互関連は無いと指摘した。これには私を含め同意する意見が聞かれた。主催者は近隣の中国で起こっていることを北朝鮮と結びつけて考えたかったようだが、関連性が薄いことが分かったのではないかと。

複数の発言の中で北朝鮮は新義州経済特区をあきらめたという事実が分かった。現在のところ開城工業団地に全力投球の方針のようだ。

北朝鮮の問題を考える上で見逃せないのは米国の方針である。梁文秀氏によると、北朝鮮への電力支援には米国が反対の姿勢を崩さない。北朝鮮を孤立させている原因は米国にあるとの声も聞かれた。呉承烈氏は米国が北朝鮮に厳しい態度を取るために北朝鮮は中国に頼らざるを得ず、米国の同盟国である韓国としては消極的にならざるを得ないと指摘する。韓国としては兄弟である北朝鮮の面倒を見たいのだが、中国が実質的に親代わりをしている状況でどうしたらいいのか考え込んでいる状況であろう。討論の最後では南北統一の問題が提起されたが、韓国はこれに関しても迷いがあるようだ。

仁川二つの顔

翌日は仁川市視察ツアーが用意された。仁川は二つの顔を持つ人口260万の広域都市である。一つ目の顔は100年前の歴史的町並みが残る旧市街にあり、二つ目は仁川国際空



写真1 自由公園より仁川港を望む

港や松島新都市に代表される広域未来都市にある。

仁川界限は120年ほど前までは濱浦と呼ばれる小さな漁村だったという。しかし、朝鮮時代末期、欧米列強によって強制開港され、欧米からの人と文化の流入で賑やかな街に姿を変えた。現在も旧市街一帯には100年前の欧米、中国、日本などの外国文化が残されている。欧米文化を伝えているものとしては沓洞聖堂などのキリスト教寺院や、韓国初の西欧式公園として造成された「自由公園」があり、春は桜並木、秋は黄葉が美しく、市民の憩いの場となっている（写真1）。公園の高台には仁川上陸作戦を成功に導いたマッカーサー将軍の銅像が仁川港を見下ろす姿で立ち、韓米修交100周年記念塔もある。中国文化を伝えているのはチャイナタウンだ（写真2）。横浜や神戸などのチャイナタウンと同じように、赤い牌楼をくぐると通りに中華料理店が軒を連ね、中華学校もある。日本との関係を伝えているものとしては、仁川に欧米の金融業を伝えたとされる旧第一銀行仁川支店の建物があり、現在は月尾観光広報館として利用されている（写真3）。他にも旧十八銀行、旧五十八銀行、旧仁川郵便局などの和製洋館を見ることが出来る。



写真2 チャイナタウン



写真3 旧第一銀行仁川支店

仁川の新しい顔として市が開発に力を入れているのが、2003年8月、韓国初の経済自由区域に指定された仁川経済自由区域（IFEZ: Incheon Free Economic Zone）だ。IFEZは仁川国際空港や港湾施設を生かした東北アジアビジネスの核心都市として発展させる青写真を描いており、国際ビジネス及び最先端産業のメッカ「松島情報化新都市」、仁川国際空港に隣接した「永宗・龍游・舞衣地区」、国際金融とエンターテインメントの発祥地「青蘿地区」の3地区から成る。

中でも「松島情報化新都市」は、松島海岸地区1,280万坪を埋め立てて、2兆1,300億ウォンを投じて20万都市を建設しようというもので、構想のスケールに驚かされる。新都市には外資を呼び込み、国際ビジネスセンター、テクノパーク、先端バイオ団地、知識情報産業団地、住宅団地などを建設する計画で、既に埋め立てを完了した区画では建設が急ピッチで進められている（写真4、5）。大規模な埋め立ての結果、かつて海辺にあった松島ビーチホテルは内陸のホテルになってしまった。

るのか。ここ数年、高賃金の韓国に見切りをつけた韓国企業は中国に生産拠点を移しつつある。また、日本企業が韓国での生産に関心を示すとも思われぬ。仁川のターゲットは欧米企業にあるようだが、国際空港に隣接する魅力を武器に、はたしてどのような外資が投資するのか。仁川における壮大な計画の進展から当分目が離せない。



写真4 松島地区の埋立地に建設される新都市



写真5 松島地区の埋立予定地

経済特区という開発手法は1990年代に中国で成功を収めたが、先進国に仲間入りした韓国で導入することに疑問が無いわけではない。韓国の高賃金で対岸の中国に対抗しう